

後期重点摘果による早生温州の高品質安定生産

消費志向に対応した温州みかん品質の高位平準化が望まれている。露地栽培での増糖手段の一つに着果負担があり、仕上げ摘果の時期を遅らせると糖度の高い果実が生産されることが知られているが、その場合の適正な葉果比や隔年結果性について調べた試験は少ない。このため仕上げ摘果を遅らせて樹に強い着果負担をかけ後期に重点摘果する場合の適正な葉果比と隔年結果性との関係を明らかにするため果実品質、収量、貯蔵炭水化物、翌年の着花等に及ぼす影響について検討した。

摘果方法

粗摘果では7～8月上旬頃に太枝や側枝に直接着生した果梗の大きい果実を中心に除き、その他の果実はできるだけ摘果せずに樹に着果負担をかける。その後9月中旬頃に仕上げ摘果を行うが、果皮表面が滑らかになり、光沢を持つまで仕上げ摘果は控える。仕上げ摘果では立ち枝や側枝背面に着生した果梗が太く、果皮の粗い果実や肥大不良の極小果を徹底的に除く。

効果

糖度は秋季の多雨条件下でも後期重点摘果で顕著に増加し、収穫時には慣行摘果に比べて1～1.5高くなり、糖度の高い果実が明らかに多く生産される(図1)。酸含量には明らかな差は認められない。果実の着色は慣行摘果に比べて明らかに早くなり(図2)、果皮色が濃く、浮皮も少ない。後期重点摘果によりショ糖とプロリン含量が増加し、慣行摘果に比べ食味が非常に優れる。

収量は同じ葉果比では後期重点摘果でやや少なくなり、階級割合は慣行摘果に比べて2L級果が少なく2S級果がやや多くなる。

強い着果負担をかけた後期重点摘果樹では慣行摘果に比べて成熟期の光合成が活発である。収穫後の小根、枝、葉の貯蔵炭水化物含量は慣行摘果と比べても十分あり、翌年の着花、新梢発生にも差は認められない(図3)。

留意点

仕上げ摘果の時期と葉果比は品種・樹勢や着果量に合わせて調節する必要がある。また、下垂気味に着果させると品質向上効果がより高くなる。

(柑橘栽培班 主任研究員 井上久雄)

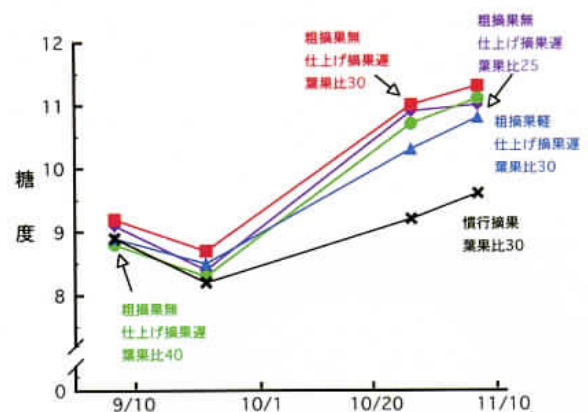


図1 着果負担、葉果比の違いと成熟期の糖度の推移 (宮川早生)



(A) 粗摘果無、仕上げ摘果遅 葉果比:30



(B) 慣行摘果 葉果比:30

図2 後期重点摘果による着果負担の違いと着色 (宮川早生、2000年10月13日)

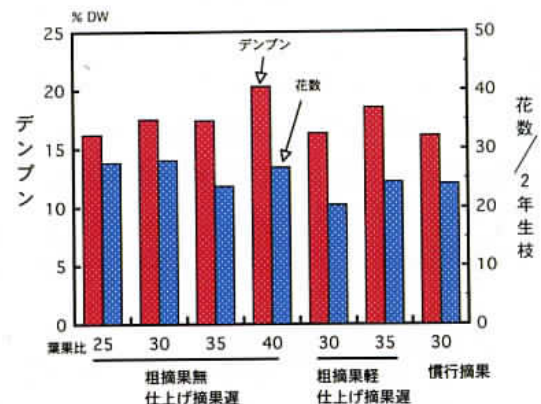


図3 着果負担、葉果比の違いと根のデンプン含量、翌年の着花 (宮川早生、デンプン:2000年12月12日、花数:2001年5月14日)